

私の近況

窪 徳 忠

久方ぶりに陪席させていただいた本年度の史学会の総会のあとの懇親会で、藤木新会長から新会長としての抱負を伺い、大へん結構だとはめあげたら、それなら近況でもいいから書いてくれと、言葉たくみに持ちかけられ、ついに無理往生をさせられてしまった。今更、どうにも書けませんからと、お断りするわけにもいかないのです、きわめて簡単に近況のご報告をさせていただくことにしたい。

私が、五年間おいていただいた史学科にお別れしてから、はやいものでもう十年になる。その間なにをしていたといわれると、お辱かしいながら、数冊の本をまとめただけで、ろくな仕事はしていない。ただ、低い鼻をいささかうごめかせてもいいと自惚れているのは、一九七六年にだした『道教史』が、一昨八七年に中国語訳され、さらに八六年にだした『道教の神々』も、来る三月には同様に訳されるときかされたことである。文字通りの「拙論」でも、読んでやるうという中国人が多少はいるようである。道教は、中華人民共和国から迷信というレッテルを貼られて、一時はその存続が危ぶまれようような状態に陥った。入ってくるのは暗いニュースばかりである。しかも、他の分野の研究者たちは、しきりに中国を訪れているのに、私たちはいくら頼んでも、よんでももらえないから、この目で道教の現状を確か

めることはできまいと、自嘲的にあきらめていた八三年、少数民族の調査にいく人々のお伴をして、ようやく約四十年ぶりにふたたび中国の地をふむことができた。

そこで、もっとも気になっていた、全真教の総本山ともいうべき北京の白雲觀をまず訪れてみた。すると、私の予想に反して、国費で立派に修復されている上に、七ヵ月周期で、全国から若い道士たちを三十名宛集めて、道教の基礎知識を教えていた。その一方、北京や成都などの大学では、宗教学科をつくって道教研究の学生の養成につとめていると聞かされて、二度びっくり。一体どういう風の吹きまわしかと、政府の方針のコペルニクスの転回に驚いたが、いづれにしても道教は将来とも存続するらしいので、安心した。その後も、幸い三回訪れているが、山東、福建、四川の各省や上海でも、大体同じような傾向である。各道觀での廟会には、多くの人々がお参りにきて、なにごとかを一心に祈っている。その様子は、台湾、マレーシア、シンガポール、インドネシアなどと、ほとんど変っていない。

そうなれば、政府もこれまでとは方針をかえざるをえないだろう。昨年は、成都で腹をこわして一週間も入院して、十分歩くことができなかったで、今年の七月から八月にかけて、もう一度いってよく見てきたいと考えている。ただ、お祭りのやり方が少々台湾とちがうので、台湾にもいって比べてみるつもりである。

一九五〇年代のなかばごろから、私は道教の日本への伝来という問題に興味をもち、六六年に初めて沖縄県地方にいった。ところが、道教的な信仰や習俗がいまだにさかに行われていることを知ってびっくりし、今日まで毎年必ず一、二回はいつている。そして、奄美地方のそれと比べているのだが、

私の近況（窪）

昨年までの三年間は奄美の加計呂麻島の竈神信仰を調べたので、今年は首里や那覇の地区の竈神信仰とを比べてみたいと思いたち、今秋いく予定にしている。

目や足腰から心臓まで、以前に比べるとかなり弱ってきたので、いつまで各地が歩けるかわからないけれども、歩けるうちは歩こうと思っている。だから、はやくまとめなければならない全真教の研究はいつになるか見当もつかない昨今である。

大体、以上のようなところが、私の近況である。末筆ながら、史学会の益々のご発展をお祈りしたい。

（一九八九・二・二四筆）

（一九七九年三月立教大学を定年退職。現在、駒沢大学非常勤講師）

追記

- 1、本年三月中国語訳本の出る予定だった道教の神々は六月末に出版された。
- 2、今年七月の中国行は、残念ながら延期することにした。

投稿についてのお知らせ

「史苑」編集委員会では、以下の要領で、原稿を随時募集しています。原稿用紙は四百字詰を一枚とします。

- | | |
|-----------------|-------|
| 一、「研究論文」 | 五十枚程度 |
| 二、「研究ノート」 | 三十枚程度 |
| 三、「研究動向」 | 十枚以内 |
| 四、「史料紹介」「調査報告」 | 十枚程度 |
| 五、「会員の論著紹介」「書評」 | 五枚程度 |
| 六、「近況、エッセイ」 | 二枚～六枚 |

※ 一～五については審査をさせていただきます。

※ 御不明の点は、編集委員会までお問い合わせください。

※ 原稿の送付先

〒一七一 豊島区西池袋三丁目

立教大学史学研究室気付

立教大学史学会

「史苑」編集委員会

電話 ○三・九八五・二四七九（直）